



connection with...

～浜松・市民農園から広がる人と自然共生の輪～

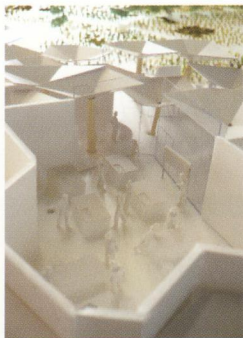
仲秋利香 (なかあきりか)

日本大学 生産工学部建築工学科



建築と、自然。「共生」を考えました。

それは、ただ自然と向き合うだけでなく「人と人」「人と自然」「人と建築」「建築と自然」の繋がりが大切なのではないでしょうか。人が見ていなくては失われていく自然を、建築の下で行われる人々の活動を通し、地域から支えあってゆくそんな施設。計画地である浜松・中田島ならではの、自然環境保護施設を提案します。中田島では、現在「中田島砂丘の侵食」「防風林の荒廃」「砂地畑の減少」が問題となっています。これらを保全するため、市民農園を基盤に、砂丘で活動を行うNPO団体や農家の拠点組織、障害者レストランをひと繋がり配置し、互いの活動を相乗的に高め、且つ、市民と支えあってゆく施設を計画しました。



【講評】 蓮の葉のような小さなエレメントが、畑をゆったり取り囲むように連なっている作品は、繊細かつエレガントな美しさを放ち見る人を引き込んでゆく。作者のさりげないセンスと自然への優しいまなざしを強く感じさせる作品である。サイトは浜松市中田島、海がめの産卵地として有名な美しい海と砂丘がダムによる河川変化によって失われつつあるという現状に、ここで生まれ育った作者が人間と自然との共生をテーマに何とかできないかという強い思いが伝わってくる。海がめNPOや障害者授産施設、レストラン等の施設が市民農園を取り囲む連環状につながって自然を守りながら社会へ広がって行こうというコンセプト、その形態として一本足傘の建築の集合体にスクリーンとしての壁を付けることで各機能を作って行く発想は、離散・集合する増殖体が柔らかく社会とつながってゆく建築を素直に、美しく表現している。わかりやすいコンセプトとプラン、屋根で受けた雨水利用等自然エネルギーへの配慮も考えられており、多くの審査員の共感を得て最終審査に残った作品である。

各機能の接点で生まれる新たなアクティビティーへの考察や、つながってゆく構造システムの提案があればもっと強い説得力を持たたのではないかとと思われる。

【審査員：柳田富士男】